人間は猛獣使い

弘前市立朝陽小学校　三浦瑛士

対象作品／中島敦著『山月記・李陵』ＫＡＤＯＫＡＷＡ

この本は姉の本だなの中にずっとあったのだが、作者の中島敦が三十三才という若さで亡くなったという事を知り、その若さで、どんな内容を書いていたのか興味をもったので、『山月記』という物語を読んでみた。

物語の舞台は中国で、李徴という人物が虎になってしまうという、とてもおどろかされる展開である。あっという間に読み進めてしまったのだが、その中でも心に強く残った文がある。

「人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣とは、その人の生まれ持った性格だという。」

これは虎になってしまった李徴が、友人の袁傪という人物に言った言葉だ。ぼくは自分自身の中にも猛獣がいるのだと、ゾッとするような気もしたが、考えてみれば、なっとくできる部分もある。ぼく自身も自分の性格に嫌気がさしてしまうような事があるからだ。そして、この物語での猛獣は、「えらそうな羞恥心」であると言う。

ぼくの場合、ちょっとした事で才能や能力が無いと落ちこんでしまうという猛獣がいる。でも、それはぼくが生きているからこそ共に存在している。だから、その猛獣と生きていくために猛獣使いにならないといけない。なぜって、その猛獣を上手く扱うことができるようになれば、いつか自分の役に立って生きてくれる事さえ有り得るのではないかと考えたからだ。

例えばぼくは、足が速くなりたいと思うのに、練習や努力をあまりしない。したくないわけではない。頭の中で、どうするかぐるぐると迷っている。きっとこれが猛獣だ。猛獣を手なづけるのには、自分にきびしくばかりするのではなく、まずは、自分を認める事が大切だと感じる。もしかすると、手なづけられるようになるには数十年どころではなく、一生かかるのかもしれない。でも、それまで色々な努力を続けて前向きに、そして、自分の中で共に生きている存在を忘れないように生きていこうと思う。